

# 教育実践報告

## 愛知県陶磁資料館「出前博物館」 —公教育としての博学連携活動—

学芸員 小川 裕紀

### [要旨]

日本における博物館教育と学校教育の関係—博学連携については従来、共同論と従属論がある。本稿ではこれに対し、博物館教育と学校教育を公教育の一部門として捉える博学連携の視点を提示した。また、博物館教育・館外活動の理論的基盤として、博物館を社会教育施設ではなく社会教育機関としてとらえ、調査研究の成果を広く紹介する情報発信・交流事業として展示と教育事業を位置付ける視点を提示した。

上記の実践として、愛知県陶磁資料館では教育事業・博学連携活動・館外活動の一つとして、「出前博物館」を2007年から実施している。これは学芸員が陶磁の実物教材を県内小学校へ持参し、教員と学芸員が連携して体験型の授業(1時限：45分間)を学級単位で行う、出前授業である。本稿ではこのうち、プログラムの一つ「愛知のやきもの」について実践報告を行う。

キーワード：公教育 博物館教育 博学連携 館外活動 出前授業 陶磁

### 1 本稿の目的

2011年4月、小学校学習指導要領が改訂施行され、初等学校教育は従来の“ゆとり教育”から教科教育の強化へと転換した。博物館と学校教育の関係については、後者が前者を活用することが引き続き規定されたほか、一部では新たに「連携」も規定され、博物館教育と学校教育の関係は新たな段階へと移行しつつある(例えば小川義和「新学習指導要領と博物館の利用」『博物館研究』499 2010年)。

愛知県陶磁資料館は、1978年の展示棟開館、1986年の陶芸実習棟開館以来、学校団体の見学・実習の利用に供してきた。また、館内における各種スクール・プログラムのほか、2007年からは学芸員が焼き物や原料などを愛知県内の小学校へ持参し、学校教員と連携して体験型の授業を行う「出前博物館」を実施している。本事業は今後の学習指導要領改訂が告示・施行と進行するに従って質・量が拡充しており、博物館教育と学校教育の連携のあり方に関する考察—博学連携論—に対して、基礎的な情報を提供することができる(以下、本稿では愛知県陶磁資料館について、「陶磁資料館」ないし「同館」と記載する)。

そこで、本稿では陶磁資料館の出前博物館事業について概要を報告するとともに、博学連携論について基礎的な考察を試みることにする。

## 2 陶磁資料館の出前博物館(1)―目標・計画から実施まで―

本事業は陶磁資料館の情報発信・交流事業における教育事業・博学連携活動の一つである。

### (1) 目標設定・計画策定

#### ① 基本方針

陶磁文化の情報発信・交流事業によって、知性・感性を高め、観察力・理解力・表現力を育成し、創造的で多様性のある芸術文化に基づいた、心豊かな個人・地域社会を実現する。

#### ② 中期目標

a 県内全域での愛知県陶磁資料館利用の促進

b 次世代への陶磁文化の情報発信・交流

#### ③ 成果指標

a 学芸員が県内全域の小学校へ陶磁資料を持参し、教員と連携して体験型の授業を行う。

#### ④ 年度目標値

a 10校(約20-30学級。学級毎に実施)

b 県内各地域1校以上(名古屋・尾張・海部・知多・西三河・東三河)

### (2) 実施

#### ① 内容

a プログラムA「愛知のやきもの」

##### i ねらい

主に小学校(中学年)社会科「県内の特色ある地域」の「伝統的な工業」、または「地域の人々の生活」の「古くから残る暮らしにかかわる道具」に関連した利用を想定した出前連携授業。愛知県の伝統的な焼き物を見たり触れたりして、身近な地域や県域について理解を深め、親しみや誇りを育てることをねらいとする。

##### ii 概要

授業導入部では、陶磁資料館が所蔵する歴史資料(歴史的な土器・陶磁器の破片等)を用いて陶磁器の種類や伝統的な瀬戸焼・常滑焼の特徴について学習する。次いで、「伝統的な工業」の関連利用の場合には、瀬戸焼の原料・製作工程見本や近代的な瀬戸焼製品を用いて、伝統的な瀬戸焼の製作技法や、生産の保護・活用について学習する。また「古くから残る暮らしにかかわる道具」の関連利用の場合には、近代の瀬戸焼・常滑焼製品によって、陶磁器を用いた昔の生活について学習する。

b プログラムB「やきものの歴史」

##### i ねらい

主に小学校6年社会科「我が国の歴史」または「我が国の伝統や文化」に関連した利用を想定した出前連携授業。日本の歴史的な焼き物を実物に即して学習して、

日本の歴史と伝統・文化について理解を深め、親しみと誇りを育てることをねらいとする。

## ii 概要

授業導入部では、陶磁資料館が所蔵する歴史資料(歴史的な上器・陶磁器の破片等)を用いて、やきものの陶磁器の種類と歴史について学習する。次いで弥生土器・須恵器・室町文化の「茶の湯」茶碗・豊臣秀吉の朝鮮出兵後に成立した九州陶磁等を用いて、焼き物からみた日本の歴史と文化の特徴について学習する。

## c プログラム C「やきものの鑑賞」

### i ねらい

主に小学校図工科「鑑賞」に関連した利用を想定した出前連携授業。日本等の歴史的な焼き物を様々な視点から主体的に鑑賞して、伝統・文化について理解を深め、その美を感じ取る力を育て豊かな情操を養うことをねらいとする。

### ii 概要

授業導入部では、陶磁資料館が所蔵する陶磁資料を用いて、陶磁器の種類について学習する。次いで瀬戸焼など陶磁の壺・皿等 3 点程度を用いて、児童自身が形・色や材質感等の造形的な特徴を捉え、イメージをもち、話し合う活動を中心に、伝統的な陶磁器の鑑賞について学習する。

## ② 年度実績 [表 1]

a 2007 年度:5 校、2008 年度:10 校、2009 年度:15 校、2010 年度:23 校。

07-10 年度計 143 学級 (学級毎に実施)。

b 名古屋・尾張・西三河は毎年度 1 校以上。

07-10 年度計で海部・知多は各 1、東三河は 0 校。

c 07-10 年度で B・C は各 1 校、他は全て A。

3 年生:1 校、5 年生:3 校、6 年生:1 校、他は全て 4 年生。

上述の通り、本事業は毎年、質・量を拡充して展開してきたが、最も実施回数が多く中心的な位置をしめてきたプログラムは A「愛知のやきもの」であり、実施校の多くは「伝統的な工業」に関連させる、名古屋市内の小学校であった。そこで、以下本稿では同プログラムに焦点をあてて概要を報告するとともに、博学連携論について基礎的な考察を試みることにする。

## 3 「愛知のやきもの」

本プログラムは、学芸員と教員が連携して、学級毎に 1 時限(45 分間)で実施する。[表 2][資料]

### (1) 導入 1「焼き物の分類」

#### ① ねらい

焼き物の種類に関する基礎知識の一つとして、材質による分類を紹介し、実習に

よってこれを体験的に理解させる。導入 2 及び展開 1 の前提事項を示して、これらに繋げるとともに、児童自身が普段利用している陶磁器の多様性への気付きを促す。

## ② 内容

### a 教材

#### i 実物教材

(i) 教壇上提示：陶器皿(瀬戸・現代)・磁器皿(瀬戸・現代)、各 1 点

(ii) 児童各班卓：土器片(愛知・弥生時代)・陶器片(瀬戸・中世)・炆器片(常滑・鎌倉時代)磁器(瀬戸・明治時代)・ファインセラミックス製ネジ(現代)、各約 3 点 [図 4]

#### ii ワークシート

### b 学芸員・教員・児童の活動

i 学芸員がワークシート中の「焼き物の分類」によって、材質による陶磁の五種分類の存在を指摘する。

ii 教室前列の任意の児童 2 名を学芸員が指名し、教壇で陶器皿と磁器皿を他の児童に提示させる。学芸員が両皿を順に叩き、全児童に打音を聴かせるとともに、教壇の児童に打音の違いの内容について発表させる。 [図 3]

iii 以上を踏まえ、授業開始前に予め 4～6 名程度のグループ(班)毎に設置した陶磁器(片)について、児童グループ毎に、色・質感・打音による分類を行わせる(3 分間程度)。この間、学芸員・教員は机間巡視して適宜補助する。 [図 5]

iv ワークシート「焼き物の分類」に従い、学芸員が児童全員挙手による答え合わせを行う。 [図 6]

v 導入 1 のまとめとして、学芸員が材質による陶磁の五種分類の存在を再び指摘するとともに、児童自身が普段利用している陶磁器についても分類を適用することを促す。

## ③ 解説

ここでは、陶磁文化の体験的な理解を通じて、児童の観察力・理解力を育成し、児童が自分たちの生活文化を主体的にとらえることができるようにすることを、総合的な目標としている。博物館教育の、実物資料から多義的な価値を見出す特質を発揮しつつ、学校教育の指導単元「伝統的な工業などの地場産業の盛んな地域」で扱う工業製品を、より広い視野から考えることができるよう指導する必要がある。

## (2) 導入 2「愛知県の伝統的な焼き物」・展開 1「伝統的な瀬戸焼の特徴」

### ① ねらい

愛知県で生産される伝統的な焼き物として、常滑焼と瀬戸焼を比較し、導入 1 の指導事項を踏まえ、両者の材質的な特徴を理解させる。両者の違いの要因として原料の違いがあることを指摘して展開 2 へ繋げるとともに、地域の伝統的な陶磁器産業の多様性に気付かせる。

## ② 内容

### a 教材

#### i 実物教材

(i) 教壇上提示：常滑焼急須(現代)・赤津焼七釉湯呑(現代)・瀬戸染付焼花入(現代) [図 7]

(ii) 児童各班卓：(1)と同じ

#### ii ワークシート

### b 学芸員・教員・児童の活動

i ワークシート中の「愛知県の伝統的な焼き物」の空欄へ児童が記入する事項を、学芸員が板書する。児童は板書を筆写。学芸員・教員は机間巡視して確認・補助する。 [図 8]

ii 導入 1 で観察した児童各班卓教材の内、陶器片・磁器が瀬戸焼、炆器片が常滑焼であることを伝え、同一県内の伝統的な両産地製品には、材質上の違いがあることを指摘する。また、伝統的な瀬戸焼では陶器と磁器の両者が生産される点が特徴であることも理解させる。説明に際しては児童各班卓の陶片資料に加え、教壇からは現行製品・完形品の実物教材も提示し、児童の理解を助ける。

iii 伝統的な常滑焼と瀬戸焼における材質上の違いの要因を児童に考えさせ、適宜指名・発表させた後、両者の原料の違いを指摘して展開 2 へ繋げる。

iv 展開 1 は導入 2 に含め、事前に教員から指導事項として実施要請があった場合等には、陶器が先行し、磁器が後から生産され始める瀬戸焼の歴史や、赤津焼の七釉製品を紹介する。

v 本項最終段階に、展開 2 の準備作業として、学芸員・教員が児童各班卓の(1)(=2)教材を、児童に各班卓下へ収納させる。

## ③ 解説

ここでは児童が、陶磁文化の理解を通じて、自分たちの住んでいる地域の特色を考えることができるようにすることを、総合的な目標としている。博物館教育と学校教育は、地域社会の形成に寄与することを主な目的の一つとしていることで共通していることを踏まえ、博物館・学芸員と学校・教員が教育目標を共有して指導にあたる必要がある。

### (3) 展開 2「伝統的な瀬戸焼の原料」

#### ① ねらい

伝統的な瀬戸焼の素地土及びその主要原料の実物を提示し、伝統的な工業の原料が伝統的な工業製品の生産地域から産出することを指摘する。伝統的な工業が地域の自然環境の資源を活用しており、地域に密着した産業であることを理解させる。

## ② 内容

### a 教材

#### i 実物教材

- (i) 教壇上提示：なし
- (ii) 児童各班卓：蛙目粘土・木節粘土・砂婆、素地上 [画像 9]
- ii ワークシート
- b 学芸員・教員・児童の活動
  - i ワークシート中の「伝統的な瀬戸焼の原料」によって、伝統的な瀬戸焼の素地上原料の採掘場の光景と、そこから採掘される原料名称：蛙目粘土・木節粘土・砂婆を確認し、伝統的な瀬戸焼の素地上原料が瀬戸市内から産出することを理解させる。
  - ii 学芸員・教員が、児童各班卓へ蛙目粘土・木節粘土・砂婆を設置する。
  - iii 引き続き、学芸員が児童各班卓へ素地上を設置する。児童グループ毎に、原料・素地上を自由観察させ、質感等を体験的に理解させる(3分間程度)。 [図 10]
  - iv 学芸員・教員が児童の観察活動を休止させ、学芸員が伝統的な瀬戸焼の素地上の製作工程として、蛙目粘土・木節粘土・砂婆を粉碎・水簸・調合する工程を伝える(児童の理解状況に応じて板書を行う)。
  - v 展開2のまとめとして、伝統的な瀬戸焼の素地上原料が瀬戸市内から産出することを再確認し、伝統的な陶磁器工業が地域の自然環境の資源を活用し、地域に密着した産業であることを理解させる。

### ③ 解説

ここでは、陶磁文化の体験的な理解を通じて、児童の観察力・理解力を育成し、児童が地域の伝統的・文化的な資源地域を支える自然資源の存在をとらえることができるようにすることを、総合的な目標としている。博物館教育の、実物資料を主体的に観察・考察する特質を発揮しつつ、博物館教育と学校教育が地域社会の各種資源の理解と向上のために、協働して教育活動を行うことが必要である。

### (4) 展開3「伝統的な瀬戸焼の作り方」

#### ① ねらい

伝統的な瀬戸焼の製法について、実物教材を提示して基本的な工程を理解させる。陶磁器製法における工程上の特質、工夫や努力を指摘して、伝統的な技術を形成・継承・発展させてきた地域の人々、地域社会に対する誇りと愛着を育てる。

#### ② 内容

##### a 教材

##### i 実物教材

(i) 教壇上提示：瀬戸焼製作工程見本(成形品・素焼品・染付本焼品の皿、各1枚)、赤津焼黄瀬戸釉製品・織部釉製品及び両釉薬 [図 12]

(ii) 児童各班卓：なし

##### ii ワークシート

##### b 学芸員・教員・児童の活動

i ワークシート中の「伝統的な瀬戸焼の作り方」の空欄へ児童が記入する事項を、学芸員が板書する。児童は板書を筆写。学芸員・教員は机間巡視して確認・補助

する。[図 11 の左]

- ii 教室前列の任意の児童 3 名を学芸員が指名し、教壇で成形品・素焼品・染付本焼品の皿を他の児童に提示させる。学芸員がこれらの皿を順に叩き、全児童に打音を聴かせるとともに、色調の違いについても指摘する。なお、事前に教員から指導事項として実施要請があった場合等には、常滑焼の製作工程との違い(素焼きを行わない)を紹介する。

[図 13]

- iii 前項の児童 3 名を席へ帰着させた後、学芸員が成形品と完成品を重ね合わせて児童に提示する。焼成後の製品収縮について指摘し、製品収縮が陶磁器生産における大きな特徴であり、生産にあたって工夫が必要な点であることを理解させる。
- iv 学芸員が教壇で、赤津焼黄瀬戸釉製品・織部釉製品及び両釉薬を提示する。焼成後の色調変化について指摘し、これが陶磁器生産における特徴の一つであり、生産にあたって工夫が必要な点であることを理解させる。
- v iii・ivでは、紙工作・木工など他素材の工作との比較によって、陶磁器生産の特徴を理解させ、図画工作科における表現活動との関連付けを図ることも必要である。

### ③ 解説

ここでは、陶磁文化の理解を通じて、伝統的な技術を形成・継承・発展させてきた地域の人々、地域社会に対する誇りと愛着を育てることを、総合的な目標としている。博物館資料一個別・具体的な実物教材を用いた博学連携活動では、動もすれば、資料・教材の個別・具体性を越えた教育目標を見失うことがあるが、教育活動における目標の一つは、こうした抽象的な力の育成であることを確認する必要がある。

## (5) 展開 4「近代的な瀬戸焼」

### ① ねらい

ファインセラミックス(FC)製品やセラミックデザインの製品を提示し、近代的な陶磁生産の概要を理解させる。瀬戸の近代的な陶磁生産における、焼き物の性質の活用と工夫を指摘し、地域の産業の発展について関心をもつようにする。

### ② 内容

#### a 教材

##### i 実物教材

(i) 教壇上提示: 碇子・FC 製鉢・ノベルティ(陶磁製置物)人形・給食用陶磁製食器、瀬戸染付焼花入(現代)・瀬戸染付焼デザイン食器(現代) [図 14]

(ii) 児童各班卓: なし

##### ii ワークシート

#### b 学芸員・教員・児童の活動

i 学芸員がワークシート中の「近代的な瀬戸焼」の項目を指摘する。

- ii 学芸員が教壇で罫子を児童に提示し、用途を考えさせる。学芸員が児童を適宜指名、発表させた後、罫子の利用状況の略図を板書する。教室条件に応じて、児童に窓から屋外の電柱を観察させ、理解を助ける。これらの後に学芸員が陶磁の絶縁性を伝え、電気製品における陶磁製品の利用について指摘する。[図 11 の右]
- iii 学芸員が教壇でファインセラミックス製鉢を児童に提示し、鉢を FC で製作する理由を考えさせる。学芸員が児童を適宜指名、発表させた後、児童使用の金属製鉢などと比較しつつ、陶磁の耐食性・非磁性や FC の高強度性を指摘する。
- iv まず、導入 2 で教壇から提示した伝統的な瀬戸染付焼花入を学芸員が再び提示する。次いで瀬戸染付焼デザイン食器を合わせて提示し、伝統的な瀬戸焼の生産活動において、伝統的な原料や製作技法を継承しつつ、形状や模様を現代生活に適合させ、生産を継続させる工夫と努力を行っていることを理解させる。
- v ノベルティについては、時間調整用の予備項目とするが、実施の場合は石膏型を用いた成形法を紹介するとともに、瀬戸焼素地上の可塑性の高さを指摘する。また、給食用陶磁製食器については、給食で陶磁製食器を用いている学校のみで実施し、給食用陶磁製食器が硬化磁器であることを指摘し、打音によって高強度性を理解させる。

### ③ 解説

ここでは、近代陶磁を通じて、近代産業における生産上の工夫・努力や、製品と生活との関わりについて理解し、産業の発展について関心をもつことを総合的な目標としている。地域及びそれを超えた現代社会の課題の一つである産業振興について、公的な教育機関である博物館と学校が連携して教育活動を行うことで、近代的市民社会の形成に寄与しようとする、公教育の責務の一端をともに果たすことが必要である。

### (6) まとめ：質疑応答・瀬戸市及び陶磁資料館紹介

#### ① ねらい

学芸員の質疑応答によって、学習対象となった瀬戸焼と瀬戸市域について理解を深める。また、学芸員の博物館等パンフレット配布によって、瀬戸市域における見学や調査などの体験的活動について関心を高めるようにする。

#### ② 内容

##### a 教材

##### i 実物教材

なし

##### ii パンフレット

##### b 学芸員・教員・児童の活動

- i 本プログラムのまとめとして、質疑応答の時間を設ける。本プログラムが単元の調べ学習ないしまとめとして位置付けられている場合は、教員が事前指導として児童に質問を用意させるほか、事前に教員が児童の質問をとりまとめて学



芸員に提示し、学芸員が予め回答を用意しておく必要がある。また、教室での実際の質疑応答活動に際しては、教員が児童を順次適宜指名し、学芸員が回答する形式をとり、本活動が円滑に進行するように工夫する。

- ii 最後に、学芸員が児童に陶磁資料館パンフレットを配布する。学習の対象地域である瀬戸市域への理解を深めるとともに、博物館施設での学習・体験活動について関心をもつようにする。なお、事前に教員から指導事項として要請があった場合には、瀬戸市の観光案内パンフレット等も配布する。

### ③ 解説

ここでは、質疑応答活動によって児童の考える力や表現する力を育てるとともに、地域の文化資源について理解を深め、地域社会に対する誇りと愛着を育てることを、総合的な目標としている。児童が社会的な見方・考え方、科学的な見方・考え方を養い、次世代においてより心豊かな個人・地域社会が実現するように、公的教育機関である博物館と学校が共同で教育実践を行う必要がある。

## 4 陶磁資料館の出前博物館(2)―検証・評価―

### (1) 検証・評価

#### ① 評定

- a 判定 : おおむね達成
- b 方向性: 拡充・維持 (年度目標値: 20 校)

### (2) 分析

#### ① 博物館教育

近年の経済状況の転換により、博物館は社会的存在意義を厳しく問われるようになった。博物館は地域住民の怨嗟の対象となることを回避し、歴史的・社会的な使命を果たすために、情報発信・交流事業(調査研究に基づく展示・教育)を強化して存在意義を高めることが急務である。本事業は、学校教育と連携して県内各地の小学校で実施する博物館教育・館外活動であり、県域・次世代への情報発信・交流の効果が極めて高いといえる。

#### ② 学校教育

小学校教育は今次の学習指導要領改訂(20 年告示、23 年度全面施行)により、従来のゆとり教育から教科教育の強化へと転換した。そのため、校外学習の時間が減少し、博物館を学校団体として来館利用することが難しい状況となっている。一方、指導要領では教科教育において博物館等を活用することが規定されている。以上の結果、学校は博物館に対し、本事業のような、教科教育へより直接的に関連付けられた館外活動を求める傾向が強まっている。

## 5 博学連携論の現状と課題

日本における博物館教育と学校教育の関係については、博物館学芸員と学校教員が両者の特質・独自性を相互に理解した上で、共同で教育実践を行うことの必要性が、博物

館学において提起されてきた（例えば廣瀬隆人「生涯学習時代の博物館と学校教育」『MOUSEION』39 立教大学学校・社会教育講座 1993年）。ただし、両者の関係については、後者が前者に「従属」する形で歴史的に「連携」が展開してきたとする、博物館関係者による提議がある（例えば金子淳「博物館で学ぶ」『社会教育』学文社 2010年）。ここでは「博物館の主体性」の不足ないし欠如が問題視されてきた（例えば長谷川賢二「公立博物館の展示と歴史研究」『歴史評論』598 2000年）。

以上のように、博物館教育論においては、従来、博物館教育と学校教育はそれぞれ異なる性質のものとして対置されており、共通性に対する認識は少なかった。博物館関係者による博学連携論においては、主に博物館教育と学校教育の独自性や主体性を前提条件として論じられてきた。ここでは、博物館教育は社会教育の一要素として学校教育と対置されており、博物館関係者は博物館教育ないし社会教育の立場を越えることはない。博物館関係者は、学習者の主体性という社会教育・博物館教育における教育形態の特質と、博物館教育の「主体性」を混同する陥穽に陥っているのではないだろうか。

博学連携論において決定的に欠落しているのは、博物館教育と学校教育を、ともに公教育の一部門として捉える視点である。本稿報告で紹介の通り、博物館教育と学校教育はともに公教育の主要な一部門として、近代的な市民社会の形成に寄与することを主な目的の一つとすることで共通しており、教育目標を共有することが可能である。今後の博学連携活動においては、「規範的博物館論」を越え、博物館教育や学校教育の「主体性」に拘泥することなく、現代社会における諸課題の解決・達成のために博物館教育と学校教育が教育目標を共有し、両者の教育方法と内容の独自性を相互理解した上で、共同で教育実践にあたる必要があるのではないだろうか（「規範的博物館論」の語については金子淳「今後の博物館活動と博物館学の方向性」『高度専門職学芸員の養成』神奈川大学 2008年）。

なお、博物館が実施する館外活動については、これを博物館事業全体において補助的に位置付けようとする博物館教育論と、博物館の使命や戦略の達成手段として適合する限りにおいて積極的に位置付けようとする論がある（例えば前者は岩崎誠司「博物館の館外活動を考える」『MUSEUM ちば』39 千葉県博物館協会 2008年、後者は佐々木秀彦「館外活動再考 その活動は本当にすべきか?」『同』）。前者は博物館を社会教育「施設」として位置付ける博物館運営論に基づくものと思われるが、近年の博物館学研究においては、博物館は社会教育「機関」として捉えられるようになってきている（例えば倉田公裕・矢島國雄『新編 博物館学』東京堂出版 1997年）。博物館における館内経営資源の運営上、博物館の使命や博物館教育の目標達成のために有効であるならば、館外活動「出前博物館」は積極的に展開されるべきであろう。（参考・平成 22 年度に陶磁資料館を同館施設内で学校行事として団体利用した児童・生徒数：3,585 人。同年度に同館出前博物館を県内小学校内で受講した児童数：1,676 人。）

## 6 今後の課題－陶磁資料館の出前博物館(3)改善－

### (1) 意義に関する事項

博物館学において、博物館の出前講座・出前博物館は、博物館の教育事業であると同時に、博物館自体の広報的事業として位置付けられることが多い(例えば、大堀哲「博物館の教育サービス」『新版・博物館学講座 10 生涯学習と博物館活動』雄山閣出版 1999 年)。陶磁資料館においても、本事業は現在、「普及」・「普及啓発」・「教育普及」・「教育」の事業の一つとして位置付けられている。

本事業の主担当者である筆者は、事業開始時には本事業を“普及事業”として位置付けていたが、事業実践と博物館学における議論を踏まえて、やがて“教育普及事業”、次いで“教育事業”として、現在は本項下記の通り本事業を意義付けるに至っている(「普及」の語を使用しないことについては、前掲倉田・矢島 1997 等を参考とした)。今後も教育実践を通じて、本事業を教育全般や文化行政など多様な視点からとらえる作業を継続し、本事業の意義を不断に検証・評価していく必要がある。

生涯教育(生涯学習)は、学校教育・家庭教育・社会教育から構成される。社会教育は、学習者の自発性・多様性・地域性・体験性等の特徴をもつ教育で、社会教育を行う公的施設・機関として、公民館・図書館・博物館等がある。博物館は、実物資料の収集・保存、調査研究を行い、その成果に基づいて情報発信・交流事業(展示・教育)を実施する社会教育機関である。

博物館教育と学校教育はともに公教育の主要な部門として、近代的市民社会の形成に寄与することを主要な目的の一つとしている。前者は実物資料の収集・保存と調査研究に基づき、学習者が実物資料から多義的な価値を見出せるよう実施すること、後者は学習者の発達段階に応じて教科と特別活動を体系的に実施することに大きな特徴がある。博学連携はこうした特性を踏まえ、両者の教育効果をより高めるために行うもので、出前博物館は博物館教育の館外活動の一つとして、また学校教育の体験学習・地域資源活用の一つとして実施する。

博物館における研究と教育については、研究を主、教育を副と位置付ける博物館経営論と、研究と教育を並立させる経営論がある。教育事業についても、館内活動を主、館外を副とする運営論と、両者を並立させる運営論がある。近年、博物館に対する社会的要請は多様化しており、単一の規範的な博物館論に基づいて各博物館が事業を実施する時代は終わり、各博物館・各学芸員が経営方針を戦略的に選びとる時代となっている。

本事業では上記の議論を止揚し、教育事業を、調査研究の成果を広く紹介する、博物館の情報発信・交流事業として展示事業と並立させることとしたい。その実践のために、調査研究成果を出前博物館に反映させることが必要である。また、博物館教育が他の各種教育と有効な連携を図るために、博物館の教育観(目標とする人間像、教育方法・内容など)を確立することが必要である。

## (2) 目標・計画に関する事項

本事業の実施にあたり、2007 年度から 2010 年度までの実施状況を踏まえ、今後 3

カ年程度、本項下記について特に留意する必要がある。

県内の幅広い地域での実施を引き続き目指すために、県内の地域性との関連性が低いプログラム(B「歴史」・C「鑑賞」)を中心に、構成・内容の改善を継続して実施する。改善にあたっては、プログラム A も含め、陶磁専門の博物館として陶磁文化の多面的な情報発信に留意しつつ、出前博物館実施校の担当教員をはじめ、陶磁資料館の教員向け陶磁講座や愛知県美術館の鑑賞学習交流会・同 WG の参加教員等と共同で、双方向的な博学連携によるプログラム開発・改善に努める必要がある。

(1)意義に関する事項と、本項上記を踏まえ、成果指標に下記を追加する。

b 教員や県美術館との連携、学芸員の調査研究活動に基づき、プログラムの開発・改善を行う。

また、2009-2010 年度の実施状況を踏まえ、年度目標値を 20 校とする。

筆者は先年、陶磁資料館の使命・試案として「陶磁について様々な関心の方向性をもつ県民等が、多彩な良質の陶磁と接することによって知性と感性を高め、創造的で多様性のある芸術文化に基づいた、心豊かな地域社会を実現する。」(拙稿「昭和 35 年「日本陶磁器博物館(仮称)設立趣意書」『愛知県陶磁資料館研究紀要』16 2011 年)を提示した。その実現のために、本事業の出発点となる、陶磁資料館教育事業の基本方針は、既述の通り「陶磁文化の情報発信・交流事業によって、知性・感性を高め、観察力・理解力・表現力を育成し、創造的で多様性のある芸術文化に基づいた、心豊かな個人・地域社会を実現する。」と設定している。これらの使命・基本方針を達成するために、どのような教育事業・博学連携・出前博物館を行う必要があるのか。博物館教育に携わる者は、現在の「入館者」の範囲を越えた幅広い「顧客」に対するマーケティングと、博物館・教育におけるイノベーション(革新)を中心とした、博物館教育マネジメントに基づいて、実践に取り組みなければならない。

本稿の一部は、2011 年 2 月 26 日に愛知県美術館で開催された「先生方との鑑賞学習交流会」において筆者が配布した、陶磁資料館教育事業の案内資料の内容を改編したものである。また、同資料及び本稿内容は、基本的には 2007 年から 2010 年度までの実践を踏まえてとりまとめたものであるが、本稿の画像については本稿テキストの構成・内容に基づき 2011 年 12 月 8 日・名古屋市立大清水小学校第 4 学年の実践において新規撮影を行った。なお、本稿本文テキスト脱稿後に拙稿「出前博物館」随想」(『釉人』84 号 愛知県陶磁資料館友の会 2011 年 9 月)を執筆・発表した。

## Educational practice report

"Delivery Museum" of the Aichi Prefectural Ceramic Museum: Museum education as state education and cooperation of school training

OGAWA Hiroki

Abstract: There are a joint theory and a subordination theory about the cooperation of the museum education and the school training in Japan so far. On the other hand, I presented the aspect that understood the museum education and the school training as one section of the state education. Moreover, I presented two aspects as a theoretical base of the museum education and the extension service. One is not facilities of Social Education but the aspects recognized as an organization as for the museum. Another one is an aspect that recognizes the exhibition activity and the educational activity of the museum as an information sending that widely introduces the result of the surveillance study and an activity of the exchange.

One of the activities based on such an aspect is "Delivery museum" of the Aichi Prefectural Ceramic Museum. This is an educational activity in Aichi Prefectural Ceramic Museum, a coordinated activity of the museum education and the school training, the extension services, and it began in 2007. This activity is a delivery class that the museum attendant brings ceramic to the elementary school. Each class teaches it concerning ceramic as the museum attendant cooperates with the teacher. In this text, I report on program "Ceramic of Aichi".

Keyword: State education; Museum education; Coordinated activity of the museum education and the school training; Extension service; Delivery class; Ceramic

表1 愛知県陶磁資料館 出前博物館・実施履歴(事業開始:2007年-2010年度)

地区	学校名	プログラム	学年	学級数	学級児童数	学年児童数	実施日
<b>平成19年度(2007)</b> 希望校=実施校 計5校15学級547人							
西三河	高浜市立翼小学校		4	3	35	105	2007.10.18
知多	東海市立富木島小学校		4	2	34	68	2008.02.06
名古屋	名古屋市立(瑞穂区)陽明小学校		4	4	36	84	2008.02.07
尾張	尾張旭市立白鳳小学校		4	3	39	117	2008.02.20
名古屋	名古屋市立(名東区)香流小学校		4	3	40	120	2008.02.21
<b>平成20年度(2008)</b> 希望校=実施校 計10校30学級957人							
尾張	尾張旭市立旭丘小学校		4	3	31	93	2008.11.12
尾張	春日井市立東野小学校		4	3	29	87	2008.11.19
尾張	瀬戸市立水野小学校		5	2	29	58	2008.11.26
西三河	高浜市立翼小学校		4	3	38	114	2008.12.10
西三河	刈谷市立富士松南小学校		4	4	35	140	2009.01.21
名古屋	名古屋市立(瑞穂区)穂波小学校		4	2	27	54	2009.01.29
名古屋	名古屋市立(南区)笠東小学校		4	3	27	81	2009.02.04
名古屋	名古屋市立(瑞穂区)陽明小学校		4	5	33	165	2009.02.05
名古屋	名古屋市立(名東区)香流小学校		4	4	32	128	2009.02.18
尾張	瀬戸市立祖母懐小学校		4	1	23	23	2009.02.25
<b>平成21年度(2009)</b> 希望校 計23校、実施校 計15校43学級1,358人							
名古屋	名古屋市立(西区)庄内小学校	A 愛知	4	3	38	114	2009.10.21
尾張	瀬戸市立品野台小学校	A 愛知	5	1	24	24	2009.10.22
名古屋	名古屋市立(緑区)神の倉小学校	A 愛知	4	4	33	132	2009.10.28
尾張	尾張旭市立旭丘小学校	A 愛知	4	3	32	96	2009.11.11
名古屋	名古屋市立(守山区)白沢小学校	A 愛知	4	3	27	81	2010.01.20
尾張	扶桑町立柏森小学校	A 愛知	5	3	40	120	2010.01.21
名古屋	名古屋市立(瑞穂区)弥富小学校	A 愛知	4	3	38	114	2010.01.27
名古屋	名古屋市立(北区)楠西小学校	A 愛知	4	2	24	48	2010.01.28
西三河	西尾市立八ツ面小学校	A 愛知	4	4	32	128	2010.02.03
名古屋	名古屋市立(中村区)日吉小学校	A 愛知	4	2	22	44	2010.02.04
名古屋	名古屋市立(南区)笠東小学校	A 愛知	4	2	36	72	2010.02.10
西三河	刈谷市立富士松南小学校	A 愛知	4	4	31	124	2010.02.16
名古屋	名古屋市立(中川区)野田小学校	A 愛知	4	3	31	93	2010.02.17
名古屋	指山女学園大学附属小学校	A 愛知	4	2	30	60	2010.02.23
名古屋	名古屋市立(名東区)香流小学校	A 愛知	4	4	30	120	2010.02.24
<b>平成22年度(2010)</b> 希望校 計26校、実施校 計23校55学級1,676人							
西三河	岡崎市立岩津小学校	A 愛知	4	3	29	87	2010.09.08
名古屋	名古屋市立(守山区)小幡北小学校	A 愛知	4	3	31	93	2010.09.22
海部	あま市立秋竹小学校	A 愛知	3	1	37	37	2010.10.28
西三河	みよし市立北部小学校	A 愛知	4	2	39	78	2010.11.04
名古屋	名古屋市立(名東区)牧の原小学校	A 愛知	4	2	25	50	2010.11.24
尾張	尾張旭市立旭丘小学校	A 愛知	4	3	30	90	2010.11.25
尾張	瀬戸市立品野台小学校	A 愛知	4	1	17	17	2010.12.02
尾張	東郷町立高嶺小学校	B 歴史	6	3	38	84	2010.12.08
名古屋	名古屋市立(緑区)戸笠小学校	A 愛知	4	3	28	84	2011.01.12
名古屋	名古屋市立(北区)如意小学校	A 愛知	4	2	31	62	2011.01.13
名古屋	名古屋市立(名東区)藤が丘小学校	A 愛知	4	3	30	90	2011.01.19
尾張	瀬戸市立祖母懐小学校	A 愛知	4	1	21	21	2011.01.20
名古屋	名古屋市立(守山区)森孝西小学校	A 愛知	4	2	28	56	2011.01.25
名古屋	指山女学園大学附属小学校	A 愛知	4	2	30	60	2011.01.26
名古屋	名古屋市立(緑区)大清水小学校	A 愛知	4	4	37	148	2011.02.02
名古屋	名古屋市立(西区)枇杷島小学校	A 愛知	4	2	24	48	2011.02.03
名古屋	名古屋市立(千種区)上野小学校	A 愛知	4	3	36	108	2011.02.09
名古屋	名古屋市立(熱田区)高蔵小学校	A 愛知	4	2	29	58	2011.02.10
名古屋	名古屋市立(中区)正木小学校	A 愛知	4	2	24	48	2011.02.16
名古屋	名古屋市立(瑞穂区)瑞穂小学校	A 愛知	4	2	34	68	2011.02.17
名古屋	名古屋市立(守山区)白沢小学校	C 鑑賞	4	3	31	93	2011.02.23
名古屋	名古屋市立(千種区)宮根小学校	A 愛知	4	2	37	74	2011.02.24
名古屋	名古屋市立(名東区)香流小学校	A 愛知	4	4	31	124	2011.03.02

表2 学芸員・教員の事前打合せ時に用いる学習指導案

平成23年度愛知県陶磁資料館出前博物館				
<b>4a1 小学校連携授業A1「愛知のやきものー「伝統的な工業」関連コースー」[基本パターン]</b>				
<b>(1) わらい</b>				
・主に小学校(中学年)社会科「県内の特色ある地域」の「伝統的な工業」に関連した利用を想定した出前連携授業。愛知県の伝統的な焼き物を見たり触れたりして、身近な地域や県域について理解を深め、親しみや誇りを育てることをねらいとします。				
<b>(2) 内容A-1「伝統的な工業」関連コース(45分)</b>				
時間(分)	学習内容	指導事項	実物教材	児童の活動
5(5)	あいさつ 授業内容の紹介			・
5(10)	①焼き物の分類	陶器・磁器などの材質分類	(実物教材1) 土器片(古墳時代) 陶器片(瀬戸・鎌倉時代) 炆器片(常滑・鎌倉時代) 磁器(瀬戸・明治時代) FC(現代)	・ワークシート 記載事項確認 ・色・触感・打音 による識別実習 ・答え合わせ
5(15)	②愛知県の 伝統的な焼き物	瀬戸焼と常滑焼の 特徴と違い	(実物教材1) 陶器片・磁器(前掲) 炆器片(前掲)	・ワークシート 記入(板書筆写)
5(20)	③伝統的な瀬戸焼	伝統的な瀬戸焼の特徴	(実物教材2) 赤津焼(伝統的工芸品) 瀬戸染付焼(同上)	・実物教材2 観察 ・ワークシート 記載事項確認 ・
5(25)		瀬戸焼の歴史		
		伝統的な瀬戸焼の原料	(実物教材3a) 原料(蚌目・本節・砂岩) (実物教材3b) 素地土	・ワークシート 記載事項確認 ・実物教材3a 観察 ・実物教材3b 観察
5(30)		採土から製上までの工程	(実物教材4) 工程見本 (成形・素焼・本焼)	・ワークシート 記載事項確認 ・ワークシート 記入(板書筆写) ・実物教材4 観察 ・
5(30)		土練・成形から本焼までの 工程		
5(30)		工程上の工夫・努力		
10(40)	④近代的な瀬戸焼	ファインセラミックスの 特徴  生産継続のための 取り組み	(実物教材5a) 磁子・FC 鉄  (実物教材5b) デザイン食器	・ワークシート 記載事項確認 ・実物教材5a 観察 ・実物教材5b 観察 ・
5(45)	まとめ 陶磁資料館案内			パンフレット確認
*愛知県陶磁資料館作成の専用ワークシートを用いて、学級毎に行います。なお、①④は4-6人毎のグループワークとして実施します。				
*教育課程・該当単元の“まとめ”として本事業を行う場合、児童からの質問の事前準備があれば、プログラム内に10分程度の集中質疑の時間を設けます。				
*単元の指導計画に応じて、構成・内容を改編します。応募または事前打合せ時にお申し出下さい。				

焼き物の分類

	原料・加工		実 例		特 徴				
	主原料	焼成温度	歴史的な焼き物	現代の焼き物	色	透明度	音	水の吸い方	強度
土器	自然粘土 有機物	700~ 1000℃	縄文土器 弥生土器 土器類	レンガ・瓦 楠木鉢 など	こげ茶色 銅土色	不透明	たたくと に高い音が する	水を 入れると 水が漏る	弱い
陶器	調整粘土	1000~ 1200℃	志野・織部 唐津 など	食器など	白 灰赤色	不透明	に高い音	水が しみる	
炆器	調整粘土	1100~ 1300℃	須恵器 常滑・越前 丹波・備前 など	食器など	灰色 赤茶色	不透明	金属的な 音	水が しみない	
磁器	陶石・長石 珪石・粘土 カオリン	1200~ 1400℃	有田・九谷 瀬戸染付 など	食器など	白	半透明	金属的な 音	水が しみない	
ファインセラミックス	アルミナ シリコン コーシアイト など	1500℃ 以上	—	炭ファイバー 半導体 人工骨 など	(各色)	不透明	金属的な 音	水が しみない	強い

愛知県の伝統的な焼き物

	瀬戸焼		常滑焼		歴 史
	赤津焼	瀬戸染付焼			
陶器					赤津焼の起源は平安時代中期(10世紀後半)約1050年前から 瀬戸染付焼の起源は江戸時代前期(17世紀)約400年前から
炆器					常滑焼は平安時代末期(12世紀)約900年前から 常滑焼の朱泥焼は江戸時代末期(19世紀)約150年前から
磁器					磁器の瀬戸染付焼は江戸時代後期(19世紀)約200年前から

伝統的な瀬戸焼

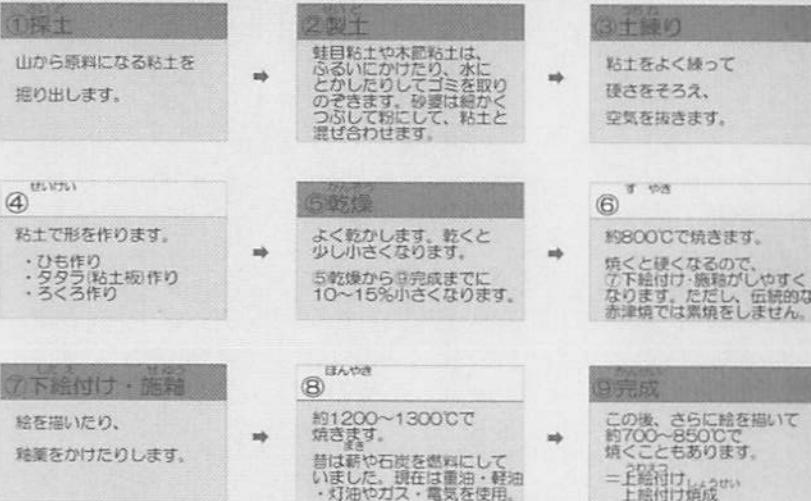
	材質	釉 薬	焼成工程
赤津焼	土器 陶器	かゆう・てつゆう・こせとゆう・きげこゆう・しのゆう・おひのゆう・おひつゆう 灰釉・鉄釉・古瀬戸釉・黄瀬戸釉・志野釉・織部釉・御染井釉	すやき 素焼をしない
瀬戸染付焼	土器 陶器 磁器	ろくろくろく・せうろくろく・ひすはいろく 透明釉・石灰釉・粋灰釉 (緑色・青色釉・青磁釉・瑠璃釉)	すやき 素焼をやる

伝統的な瀬戸焼の原料

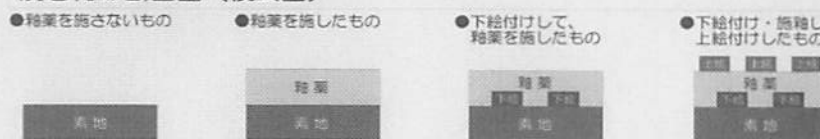
	特 徴
蛙目粘土	まじし しゃようげんりょう 焼き物の素地の主要原料
木節粘土	ねばけ 素地の粘り気を増して、 器の形を作りやすくする
砂 要	主要原料に加えて、 素地をしょうぶにする



伝統的な瀬戸焼の作り方



焼き物の断面図(模式図)



近代的な瀬戸焼

主な製品 ファインセラミックス・電気用品・ノベルティ(贈物)・タイル・洋食器





図1 教室全景(導入部冒頭)

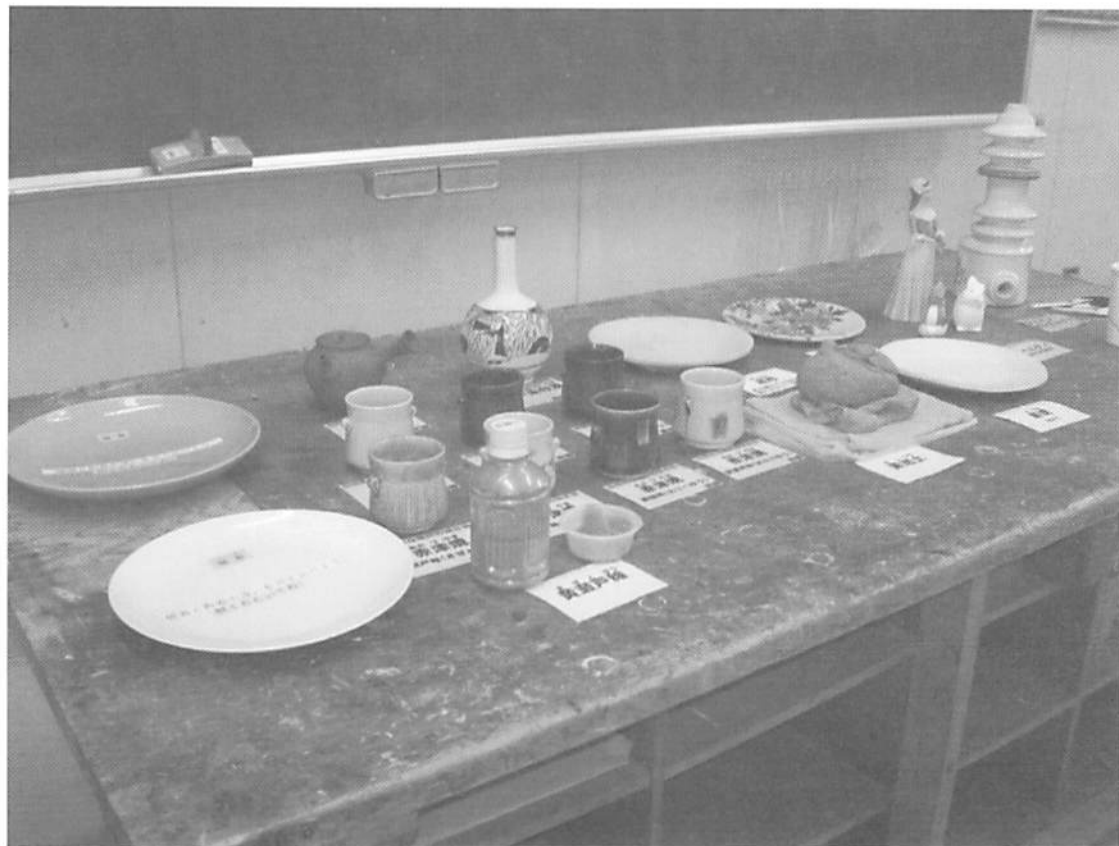


図2 教壇上提示教材一式



図3 導入1学芸員・児童活動



図4 導入1児童各班卓教材



図5 導入1 児童各班活動1



図6 導入1 児童各班活動2



図7 導入2・展開1 教壇上提示教材

	瀬戸焼		常滑焼
	赤津焼	瀬戸染付焼	
陶器	○	○	
炆器			○
磁器		○	

図8 導入2 板書



図9 展開2 児童各班卓教材



図10 展開2 児童各班活動

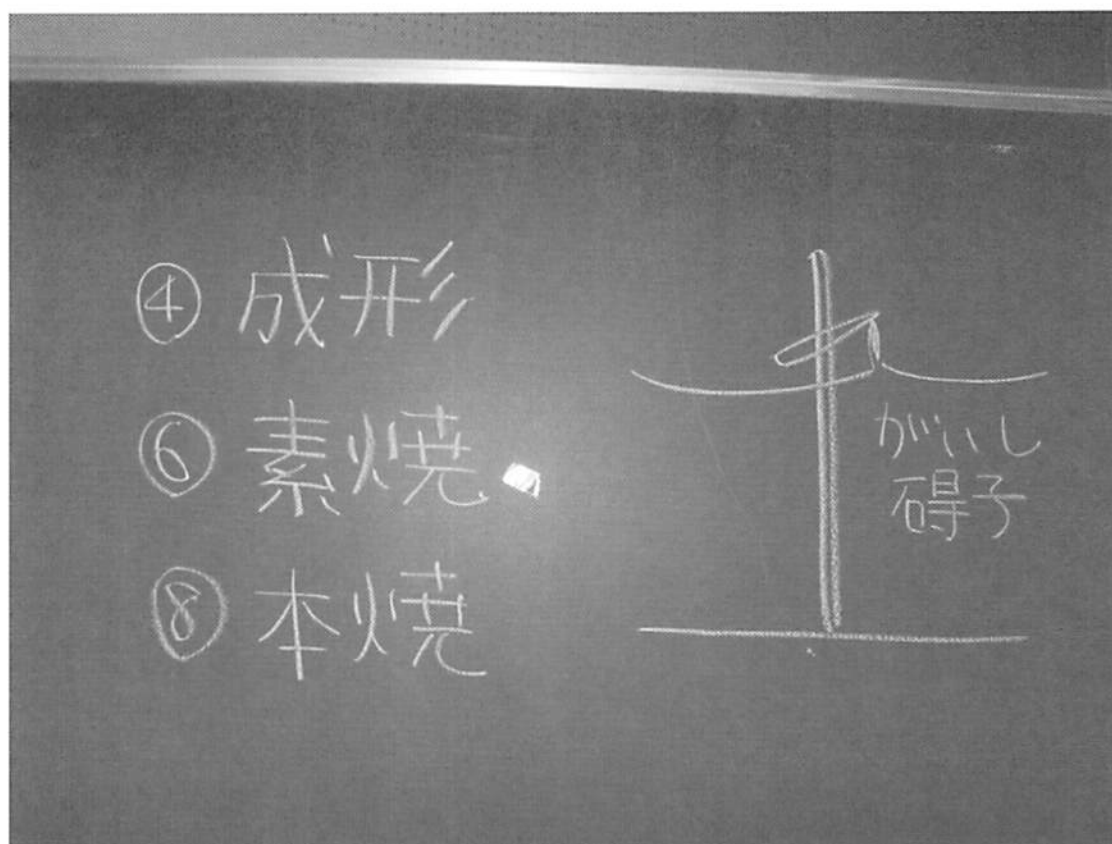


図 11 (左) 展開 3 板書 (右) 展開 4 板書



図 12 展開 3 教壇上提示教材



図 13 展開 3 学芸員・児童活動



図 14 展開 4 教壇上提示教材